String Fiction Series

1

弦楽四重奏団 a

YAMANAKA TOMOTAKA
山中與隆
Duo-Yamanka

弦楽四重奏団
a

山中與隆

目次

弦楽四重奏団 a　1
（一）　1
（二）　46
編者あとがき　108

弦楽四重奏団　a

作　山中與隆

（一）

「そこんとこ、もう一回しようか。そこまでとはガラッと雰囲気を変えないとだめだよ」

第一バイオリンの高倉健一が演奏を止めて言った。

「今のところ、雰囲気変らなかったかな？結構音色を変えたつもりなんだけど」
とチェロの栗林修造が首をかしげながら言う。
「僕の雰囲気の変え方に比べたら、三人の和音の音色はあまり変わっていなかったと思ったんだけど」
高倉は、自説を変えない。
「私も意識して柔らかい音にしたつもりよ」
第二バイオリンの村主美恵子も栗林と同じことを言

った。ビオラの桂山芳樹だけは黙ってみんなの言い分を聞いていたが、

「じゃ、もう一回その前後をやってみよう。その第二主題のメロディが始まる四小節前くらいからどう？」

と練習を前に進めたそうに言った。桂山には、自分がちょっと無神経な音を出してしまったという反省があったので今度はちゃんとやるというつもりでそ

のような発言になったのだった。実は、高倉が弾きながら
「もうちょっと良くしたい」
と感じたのは桂山の出した音に原因があったのかもしれない。
四人は桂山の言った場所から始めた。問題の第二主題に入ったとき、今度はチェロの栗林が止めた。すかさず第一バイオリンの高倉が、

「ごめんごめん。僕がまずかった。意識しすぎて失敗した。悪いけどもう一回同じところからやらせて」

四人は今度こそというように、姿勢を正して同じ場所から始めた。しかし第二主題に入って四小節進んだところで、また栗林が止めた。

「高倉さんのテンポ、いまのはいくらなんでも遅すぎない？」

「今日はまだ始めたばかりなんだから、一回くらい

通してから、細かいところ直していかない？まだ指も慣れてないし」
村主がいらいらして口を尖らせた。しかし栗林は、村主の発言を無視して、
「楽譜の指示では、第二主題の前でゆっくりするようになっているけど、第二主題に入ったら『元のテンポで』って書いてあるくらいだから、ＣＤなんかでもみんな第二主題はゆっくり弾いているけど、そ

れは何となく習慣みたいになってるだけで、本当はドボルザークの指示通り元のテンポに戻ってもいいくらいだと思うよ。今日は初めてだけど、この曲の練習、先週もやったんだから、大事なところはちゃんと議論していこうよ」

三人は、また栗林の能書きが始まったとばかり、自分の譜面に目を落として聞いていた。栗林が喋っているときから何か言いたそうにしていた高倉が、

栗林の言葉が切れるのを待ちかねたように、
「演奏は、いつもみんな言っているように生き物なんだから、ここのテンポだってたんびにそこまで来た雰囲気によって違っていいのじゃない。今のなんか、第二主題に入るときみんな凄く気をつけて良い入りかたしたから、それにあった雰囲気を出そうとしたら遅めになっただけで、あれはあれで良かったんじゃないの？」

そして

「それに、第二主題を完全にもとのテンポにするのは反対だよ。長年の演奏の歴史と伝統が作り上げた良い習慣だと思うよ」

今日は、練習の初めから角を突き合わせることになってしまった。いつもこういうわけではないが、練習の初め何故か一人くらいは不機嫌そうにしていることがよくある。大抵は練習が進むにつれて冬の

朝の氷が解けるように、お互いの意思の疎通がスムースになっていくことが多い。おそらく音楽にはメンバーの心を融け合わせる効果があるからだろう。

ビオラの桂山の分析によると、この日の練習に村主が高倉の車に便乗してきたことが、栗林の気分を何となく尖ったものにしたらしい。四人とも家庭を持っていたが、もともと村主と高倉は非常に親しかった。村主が一年前に離婚してから、一段と親密に

なったという見方を桂山はしている。そして栗林も村主に気があるらしいと桂山は見ている。確かに村主美恵子は四十半ばだがふくよかで色気のある美人である。当の桂山も嫌いではない。

いま彼らが練習しているのはドボルザークの《アメリカ》という曲で、クラシックの中でも渋いといわれる弦楽四重奏曲の中では、珍しいくらい明るくて親しみやすい曲である。彼らは一月くらい先の公

民館のイベントに出演して、これを演奏することになっている。そのために普段は二週間に一回とか、月に一回ということもある練習を、このところ毎週やっている。

《アメリカ》は四つの楽章で構成されている。全体で二十五分くらいだからクラシックのまとまった曲としては標準的か少し短めである。四つの楽章とも明快でメロディも良いので、上手く弾きさえすれ

ば、必ずしもクラシックファンとは限らない今度の公民館の聴衆にも、あまり退屈させることは無いだろうと彼らは考えてこの曲を選んだ。このような演奏会のときにはよく知られた小品を並べたり、日本の歌やアニメの主題曲などを弦楽四重奏用に編曲したものを取り上げたりすることが多いが、今回彼らは敢えて《アメリカ》全曲を楽しく聞いてもらうという、クラシックの王道を行くことにしたのだった。

しかし、練習ではあちこちで躓き、議論が起こり、よくいえば熱のこもった音楽作りが続いた。第一楽章の終盤では栗林が槍玉に上がった。第一バイオリンと掛け合いながらチェロとしては高い音域で熱っぽく弾くところだ。チェロの栗林の音程が定まらない。高倉は上手く合わせたいと言って妥協せずに何度も繰り返した。栗林は顔を歪めながら必死で弾くがなかなかぴたりと決まらない。

「よくなってきたから、念のためもう一回やっておこう」
と高倉が言ったとき、栗林は、
「ごめん。家でしっかり練習してくるから宿題にして」
と言ってこの場での解放を願った。
これは村主がよく使う逃げ口上で、高倉はこの台詞が嫌いなのだ。そんなとき

「いや、いまここで解決しておこう」
と言って、相手が村主であってもなかなか解放しない。しかし今は、何回やっても栗林が上手くいかず、かえって繰り返すたびにおかしくなっていくので、仕方なく栗林の要望に従った。
いつも口数の少ないビオラの桂山が第二楽章では、みんなに注文する場面が多かった。この楽章はビオラが終始一定の音形で伴奏をする。伴奏とはいえ、

それは音楽の進行係の役割を持っている。少し前向きに進めたり、逆に落ち着かせたり、また盛り上がったり静まったりもビオラがメロディを弾いているほかのパートをリードするところだ。この役割をよくわきまえたビオラがいるとメロディの人たちはとても気持よく弾ける。桂山は、特に第二楽章には神経を使って上手く弾く。だから他の三人も気持よく弾いていたのだが、それでも桂山に言わせると物足

りないらしい。いろいろな場所で、ここはどうあすこはどうと注文をつけるのだった。

第三楽章はいつでも誰がやるときもトリッキーで、誰かが一度は落ちるようなリズムの取りにくさがある。今回の彼らも、

「あっ、ごめん落ちた」

と誰かが言って三回もやり直しになった。また途中ボウイングのことで長い議論があり、意見がまとま

らないまま、取り敢えずそれぞれがやり易いボウイングですることで先に進んだ。ボウイングは弦楽器特有のもので、傍から見ると右手の弓は引くか押すかを繰り返して弦を擦っているだけだが、引くか押すかによって表現が違ってくるので弦楽器奏者たちはこれを大いに問題にする。基礎練習ではどちらでも同じように弾けることを目指すのだが、それでもその場の表現に向いたボウイングを考えることは常

に付いて回る面倒な問題なのである。彼らのようにアマチュアの場合、表現のための良いボウイングを選ぶということと、技術が不十分なために出来る、出来ないということも問題になるから一層ややこうしくなる。

第四楽章では違った種類の問題があった。これもチェロの栗林がらみなのだが、僅かな休符の間に素早くページをめくらなくてはならない箇所がある。

めくって直ぐに第一バイオリンと一緒にメロディを弾き始める。第一バイオリンは軽妙な感じのオブリガートを弾き、チェロが幅広いメロディを弾く。ここも静かな和音の中で第一バイオリンがゆったりと歌った後、そのまま何気なく雰囲気が変わって音楽が動き出す良いところだ。そんなところで譜めくりのためにバタバタするのは、視覚的にもよろしくない。しかし栗林は何故か大丈夫だといって対策をと

ろうとしない。そして今、栗林が譜めくりをもたついたために、高倉が栗林の構えるのを待ってちょっとだが出を躊躇した。高倉は直ぐに弾くのを止めて、

「やっぱりそこんとこ何とかならない？」

と、うんざりしたような顔つきで言った。ここのところに関するトラブルは、これが初めてではない。

「そうだね。コピーしたりして本番までには何とかしておくよ」

と言ったあと、
「めくれるんだがな」
と小さく独り言を付け加えた。高倉がその栗林をジロリと睨んだ。
こんな調子だが、それなりに練習は進んで本番の日を迎えた。本番は公民館のホールと称する大きな部屋で行なわれる。四重奏団の四人が到着したときには、もうパイプ椅子が部屋いっぱいに並べてある。

前の方に十センチくらい高くなった、ステージが作られていて、そこにもパイプ椅子が四つ出してある。係りの人が近づいてきて、

「これでいいですかね」

と四人に尋ねた。高倉が聞いた、

「僕らが一番ですよね。今からちょっと音出しできますか？」

「大丈夫です。三十分くらいなら。譜面台は皆さん

お持ちと聞いておりますが？」
「ええ、持って来ました」
四人は椅子の間隔を整え、各自譜面台を立ててから楽器を出し始めた。
「いやだー、切れてる」
村主がすっとんきょうな声を出した。高倉がすぐそばに駆け寄って、
「A線か。持ってるの？」

「あります」
村主は急いで切れた弦を張り替え始めた。手を動かしながら、
「嫌だなー。三十分くらいじゃ安定しないわ」
と独り言を言っている。すると高倉がまた村主のところに行って、
「新しいの張ってるの？一度使ったやつあげようか。それだったら伸びないよ。いまは音質よりそっちが

大事だろう」
「それ、お願いします」
村主は張りかけた新品の弦を外して、高倉がこういうときのために取っておいた弦を貫って張り始めた。
三人は村主が張り終えるまで、調弦したり指ならししたりしている。間もなく
「ごめんなさい」
と言って村主が席に着いた。四人は改めて調弦をし

てから《アメリカ》の本番直前練習を始めた。
さすがに仕上げてきた甲斐があって順調である。第一楽章がすんだとき入り口のところで立って見ていた係りの人が頷きながら拍手をした。四人は、
「演奏が良かったのだな」
と思いながら続く二、三、四楽章と進めた。第四楽章で例のチェロの譜めくりのところが近づいて、栗林は内心ハッとした。高倉と約束した対策を忘れて

いたのだ。もう早業で乗り切るしかない。その箇所で栗林は音もなく忍者のように素早くめくって、高倉と余裕でアイコンタクトをとって、良いタイミングで弾き始めた。しかし高倉は栗林が対策してないことに気付いて、弾きながら栗林の方を見た。栗林はそ知らぬ顔で弾き続けた。

リハーサルは上手くいった。係りの人の案内で四人は一旦控え室に下がった。栗林は対策してないこ

とを高倉に言われると思ったが、高倉は何も言わなかった。リハーサルのように行けば何の問題もない。それにあと十分くらいで本番が始まるのに、いまごたつくのはもっと良くないと高倉は考えたのだった。村主の張り替えた弦も問題ないらしい。

四人は大急ぎで着替えを始めた。村主だけが着替えを持ってトイレに行ったが、男達はその場で着替えた。上下黒で黒いチョウネクタイで、靴下も黒だ

が、履物は公民館の茶色のスリッパだ。村主が黒いブラウスに黒のロングスカートで控え室に戻ってきた。スラッと背筋を伸ばした姿勢で、ブラウスの胸が程よく膨らんでいる。今日のために髪をセットしたのか、いつもにも増して綺麗だ。その姿を見て高倉が恥ずかしげも無く、

「おお、綺麗」

と叫んだ。村主はちょっとはにかんだような笑みを

見せたが何も言わなかった。桂山も栗林も村主を見て高倉と同じことを思ったが、彼のようにサラッとそれを口に出来る性格ではない。

あとは本番で最高のパフォーマンスをするだけだ。みんなは緊張の面持ちで口数少なく始まるのを待った。それからもう一度最後の調弦をした。栗林は少しだけ便意を催したが、時計を見て諦めた。演奏は三十分くらいだから大丈夫だろうと思った。

ホールのほうで、端から詰めるようにと会場整理をしているらしい声が聞こえる。結構たくさん聞きにきているみたいだ。

係りの人が、

「出番です」

と案内にきた。四人は係りの後についてホールに向かった。ホールはいっぱいの客で埋まっていた。彼らはこの弦楽四重奏を聞きに来たというよりも、四

重奏の後に続く子供のステージや、町内会のグループの歌や、ママさん合唱団などを目当てに来た人たちが多いことを四重奏のみんなは知っている。

四人はステージに並んで丁寧にお辞儀をした。大きな拍手が返ってきた。四人は一旦座って調弦をした。本当の調弦は控え室ですんでいて、ここでの調弦は形式的なものなので簡単にすませた。というより、この場の緊張した中でやり直してもろくなこと

にはならないのだ。あくまでもアマチュアは控え室で落ち着いて合わせた方が正確なのだ。村主だけが気になるのか、Ａ線を丁寧に確認していた。

桂山が立って、係りからマイクを受け取って話し始めた。

「私たちの楽団にはまだ名前がありませんが、第一バイオリンの高倉が地元の住人なので、今日このイベントに参加させてもらいました。いつもこの公民

館を借りて練習しています。今日聞いていただくのはドボルザークが作った《アメリカ》という弦楽四重奏曲です。皆さんは《新世界より》という交響曲をご存知ですか？」

会場から

「下校の音楽か」

と声がかかった。

「そうですね。その交響曲を作ったのもドボルザー

クです。とても親しみやすくて人気のある曲です。今日演奏する《アメリカ》も同じころに作曲されたとても良い曲です。四つの楽章あわせて一曲になっていますそれぞれ一旦終わっては次の楽章が始まりますが、それらは続きですので拍手はいりません。全曲が終わったときに、もし良かったと思われたらたくさん拍手をいただけたら嬉しいです」

普段は無口な桂山だが、ゆっくりと語りかけるよ

うに上手く話した。桂山が座って楽器を構えるのを待って、高倉の合図で演奏が始まった。会場はシーンとして聞いている。第二楽章のようなゆっくりの曲は、クラシックに慣れていない人は退屈するものだが、会場は静かなままだ。演奏も練習の成果が出て良い感じで進んだ。誰も何の心配もせずに音楽に神経を集中させて演奏している。

ところが第四楽章の譜めくりのところで、栗林が

素早くめくろうとしたら勢い余って譜面が舞台の床に飛んでいってしまった。一瞬会場に小さなどよめきが起こったが、栗林は平気な顔をして高倉を見て次を弾き始めようとしている。高倉はそれに応じて二人は上手く弾き始めた。しかし曲の終わりまでにはまだだいぶある。三人はチェロが暗譜で大丈夫だろうかと心配しだした。一番心配しているのは栗林自身だ。すぐに記憶が怪しくなってきた。ついによ

たついて違う音を弾き出してしまった。楽譜が飛んだときから笑いを必死で堪えていた村主がとうとう噴出してしまった。演奏は止った。栗林が観客に頭を下げて、床に落ちている譜面を拾った。そして栗林自身が立ち上がって、

「すみません。楽譜が吹っ飛んだ後のところから弾きます」

と言って座った。

再び高倉と栗林が顔を合わせて弾き始めた。会場も舞台上も何事もなかったように音楽に戻った。そして最後に全員がフォルテで和音を力強く長く鳴らして終わった。その瞬間だった。会場の中央辺りで

「プーゥ」

と大きな音が聞こえドッと笑いが起きると同時にそれをかき消すように大きな拍手が起きた。まるで

「プーゥ」

も一緒に拍手されたような感じになった。演奏した四人はみな歯を見せて笑顔で拍手に応えた。会場もみな拍手しながら笑顔である。隣近所にいた人は、多少被害を受けたことだろう。

控え室に戻ると、四人は笑い崩れた。

「長年演奏してきたし、演奏会にも数え切れないくらい行ったが、初めてだよ」

「終わった瞬間でなくても、必死で我慢した経験は

あるけどね」
「咳ならいつもだわ。でも演奏してるときはあまりそうならないわね」
しばらく「プーゥ」に関する話題が続いたが、栗林がポツリと言った。
「すみませんでした。でも村主さんの機転で救われました。それに最後の会場からのハプニングでお客さんも忘れたかもしれませんね」

「別に、機転を聞かせて噴出したわけじゃなかったのだけど」
「演奏そのものは、我々にしては良かったんじゃない」
と高倉も上機嫌だ。
「次は三ヵ月後の室内楽合同発表会だね。こんどはベートーヴェンがんばろう。ベートーヴェンには今日みたいなエンディングは似合わないからね」

桂山がちょっとおどけた表情で締めくくった。
男三人はその部屋で、村主はトイレに行って着替えをした。栗林は着替えを済ませると急いで部屋を出て行った。着替えているときから何となくもじもじしていたが、ついに小さな
「プッ」
が他の二人にしっかり聞かれた。何とか演奏がすむまで持ちこたえたのだった。栗林は、村主がいない

ときでよかったと思った。
みんなが揃ったところでそれぞれの楽器と荷物を持って家路に就いた。

（二）

高倉たちは、室内楽合同発表会参加を機に楽団の名前をつけることにした。ベートーヴェン・カルテット、モーツァルト・カルテット、ハイドン・カル

テットなどがまず出てきた。自分達がしばしば演奏する弦楽四重奏曲の作曲者達の名前を冠したいという願望は当然である。しかしそれらはインターネットで調べると、すでにかなり存在している。ただしその多くは頭に東京・・・などと付いていたりする。

「われわれは一地方のアマチュア楽団で、ＣＤが市場に出回るわけでもないから、世の中に幾らあっても気にすることないのじゃない？」

と栗林。
「でも、もっといいの考えようよ」
と言ったのは村主だ。
ＴＳＫＫ四重奏団、ＫＭＹＳ四重奏団、朱鷺カルテットなどが出された。初めの二つは四人の苗字や名前の頭文字を並べたものだが、何のことだかわからないという理由で直ぐに却下された。三つ目は、栗林の一人娘の名前そのものである。栗林に聞くと、

若いころいつか四重奏団を作ったらこの名前をつけたいと思っていたのだという。

「朱鷺カルテットいいじゃないですか。誰の名前かはともかくとして響きもイメージもとっても良くない？」

村主が気に入ったようだ。栗林は内心嬉しかったが、

「でも、私の楽団というわけじゃないから、ちょっと言って見ただけだから」

と遠慮気味である。

「いや、私もいいと思いました。娘さんの名前だということを人に言わなくてもいいのだし。名前の由来を聞かれたら、青空を背景に、朱鷺色の羽根をいっぱいに広げて悠々と飛翔する姿をイメージしてつけたと言えばいい」

栗林は、自宅に飾ってある、まさに朱鷺が羽を大きく広げて飛んでいる写真を思い浮かべた。

「それで行きましょう」
「ぼくもいいですよ」
村主と桂山が同意して、「朱鷺カルテット」に決まった。栗林は村主が真っ先に賛成したことで、高倉に勝ったような気がした。
名前が決まったところで、練習を始めなくてはならない。三ヵ月後の室内楽合同発表会は一団体の持ち時間が、出入りを入れて三十分以内と決まってい

る。朱鷺カルテットがそこで発表しようとしているのはベートーヴェンの弦楽四重奏曲第八番、いわゆる「ラズモフスキー第二番」である。全曲でプロのテンポで弾いても四十分近くかかる大曲である。四つの楽章のうちどれか二楽章に絞る必要がある。

「私は二楽章と三楽章が好きだな」

と村主。

「確かに良いよね。だけどさ、三楽章は四楽章に切

れ目なく続くところがね」
と高倉。
「やっぱり一楽章は外せないでしょ。私は一と二だな」
と言ったのは栗林。
「二つの楽章しか出来ないのだったら第一楽章と第二楽章しかないでしょ」
桂山も後押ししたので決まった。

「じゃ、第一楽章からやるか」
高倉の声を合図に、四人はまだ出していなかった楽器を出し始めた。高倉と村主がすぐそばに並んで楽器ケースを広げながら、ごそごそ打ち合わせているのが、栗林のところまで聞こえてきた。
「今日何時までするの？」
「九時までしか部屋は借りてないから」
「じゃ、大丈夫ね」

栗林は自分には関係ないと思いながらも、苦い気持が胸に広がるのをどうしようもなかった。二人の会話は桂山の耳にも入ったはずだが、我関せずと言うように割り切った表情である。

この日の練習は、新しい曲の初めての合わせだったのでお互いに細かいことは言わずにざっと通しただけで終わった。といっても、難しい曲なのでテンポを落とし、それでも途中で何回も止りながらやっ

と第一、第二の二つの楽章を弾き終えたのだった。この日の練習では、件の二人が何となく練習に気が入っていないような感じがあり、栗林は始まる前からあまり気分がよくなかった。その、みんなの気の乗らない静けさは大きな出来事の前兆だった。

栗林は練習のあった日の夜中の十二時過ぎに高倉の奥さんからの電話で起こされた。練習の後みんな

で話し合いか何かあったのかという問合せだった。高倉の奥さんの話では、九時には終わるから九時半ころには帰宅すると言って練習に出かけたらしい。栗林はどう答えたらいいのか困った。高倉の奥さんが言うように、練習の後四人でファミレスに行って遅くまで話しこむことは珍しくない。それなのに奥さんはこの日に限って何故自分のところになんか電話をかけてきたりしたのだろう。まさか高倉が村主

美恵子と何か打ち合わせていたとも言えない。返事に窮していると、
「ご存じないのですね。大変失礼しました」
と言って、奥さんは一方的に電話を切った。
栗林は、村主のことで高倉家では一騒動ありそうだと思った。高倉と村主は練習の後そそくさと高倉の車に同乗して何処かに行ったところまでは見ている。もちろんそこから先のことはわからないが、十

二時過ぎても帰宅していないということは何かあったのだろう。最近のあの二人の親密振りからして、何があったかを想像するのな難しくない。しかし栗林は、ごく身近な人が小説のような行動をするのを見るのは初めてだった。もちろん、そういうことではないかもしれないが。

それからは何時になっても高倉の奥さんから電話がかかってくることはなかった。栗林は床に入って

も、そのことで目が冴えてなかなか眠れなかった。栗林も多少気があった村主だったし、何となく村主も自分に優しくしてくれると感じたこともあったので、寂しい気持に襲われた。と同時に、村主が自分ではなく高倉とカップルになったことで、自分がその立場にならなくてすんだと安堵する気持も混じっていた。

四人で集まっての練習がない朱鷺カルテットの二

週間、それぞれ自宅で課題の曲をさらっているはずであった。ところが一週間目の終わりに村主から栗林に電話が入った。個人的な事情でカルテットを辞めたいと言うのだ。桂山にも同じ電話をしたと言う。栗林が、高倉には言ったのかと聞くと、それは本人から何か連絡がある筈だと言う。

こういう問題の可能性があるから、女の混じったカルテットは難しいということを栗林は思い知った。

翌日の夜、今度は高倉が電話してきた。高倉も、事情があってカルテットを辞めなければならなくなったと言うのだ。栗林が村主も関係があるのかと聞くと、

「そうだ」

とはっきりと答えた。一体どうなっているんだと栗林は腹立たしくなった。

名前をつけたばかりの朱鷺カルテットは解散する

ことになるのだろうか。栗林は突然暗い気持ちに突き落とされた。

翌日は土曜日だったので、栗林は桂山と連絡を取って街のコーヒーショップで落ち合った。桂山にも二人から栗林にかかったのと同じ内容の電話があったそうだ。栗林が二人に対して酷く腹を立てているのに対して、桂山は違った受け取り方をしていた。

「あの二人のことはわれわれ見たとおりで、高倉さんの家では大変なことになっているのかもしれないけど、カルテットには関係ない個人的な問題と考えることは出来ませんかね。仮に高倉さんが離婚して村主さんと一緒になったとしても、我々は朱鷺カルテットの二人のバイオリンとして、これまでどおり付き合っていけばいいのだと思います。我々四人のこれまでの長い活動があるのだから、それくらいの

耐力というか、包容力があってもいいのじゃないですか」

栗林は、問題発生即解散と短絡的に考えたことを反省させられた。

「そうか。そういう考え方も出来るね。我々には高倉さんに、村主さんと別れて奥さんのところに帰れなどという資格も何もないしね。分別のあるはずのいい大人がしていることだから、二人で解決すれば

いいということか」
「そう、ただ朱鷺カルテットについて言えば、あの二人だって朱鷺カルテットを勝手に解散させる権利なんかないと思いますよ」
「そうか・・・でもどうやって辞めるって言ってる二人を説得するの。それに何処か遠くに、それこそ恋の逃避行をするかもしれないし」
「私は、それは無いと見ているんです。高倉さんは

大きな病院の副院長で、奥さんは院長の娘でしょ。彼、養子でしょ。失礼な言い方かも知れないけど、高倉さんにあの立場を捨てる覚悟はないと思いますけど」

「でも、恋は盲目って言うよ」

「それは若者か、金も力も無い男のことで、地位も名誉もある五十近い男は、盲目にはならないと思います。めったなことではね。その証拠にあの奥さん

だって、幾ら怒っていても直ぐに高倉さんを追い出したりしないじゃないですか。病院に必要な人だからですよ」

「じゃ、どうして今急に騒ぎになったの？」

「それは私にもよくわかりませんけど」

「じゃ、あんな電話もらったけど、一度二人に話してみますかね」

「連絡取ったり、呼び出したりできますか？」

「むつかしいね」
栗林と桂山はしばらく黙り込んだ。ややあって栗林が、
「そもそも桂山さんは、彼らを説得して戻ってきたとしても、このメンバーで続けたいと思います？」
「私は構わないと思っています。私はあの二人はきっと大人の対応をすると思います。初めのうちはちょっとぎこちなかったりするかもしれませんがね」

桂山は、どうしてこんなに明言できるのだろうか。高倉と村主のことを、人間的にそれほど信頼しているということだろうか。

「桂山さんがそこまで言われるのだったら、説得してみましょうかね」

「いい方法がありますか？」

「私自身はないんですが、家内が村主さんと少し親しいので、頼んでみたらどうかと思って」

「そりゃいい。ぜひお願いしますよ」

栗林は妻の真澄に相談した。栗林の予想どおり真澄は

「どうしてそこまでしなきゃならないの」

と言って渋った。栗林が粘り強く頼んだ結果やっと真澄は引き受けた。真澄はその夜直ぐに、村主に電話してくれた。

「美恵子さん、お久しぶり。元気？突然だけど一度家に来ない？話したいことがあるの」
「ええ、お邪魔するわ。私も真澄さんに話したいことがあるから」
あっけないほど簡単に会談の場がセットされた。しかも今から直ぐに行ってもいいかと言う。八時には村主美恵子が栗林の玄関のチャイムを鳴らした。玄関には真澄が出た。

玄関先で、
「修造さんいらっしゃるの？」
「いるけど、外してもらってもいいのよ」
「いいわ、三人で」
「子供達はもう自分達の部屋に上がってるから」
と小声で喋っているのがリビングの栗林のところまで聞こえてきた。
真澄の後についてリビングに現れた村主は、栗林

の想像以上に明るい笑顔で挨拶した。真澄がコーヒーを入れると直ぐに村主が話しはじめた。

「修造さん、迷惑かけてすみません。私たち急に変になっちゃって」

「先日練習のあった日の夜遅く、高倉さんの奥さんから突然電話があったりして、何ごとかと思ったんだけど」

と栗林。

「実はあの日」
と言いかけて村主は躊躇したが、
「まあいいか、どうせわかってるんだから」
と思い切りをつけてから、
「あの日はね、別れ話だったの。それもすっきり別れるというのではなくて、会う回数を減らそうって言うだけなの。何のこと？って聞きたくなるでしょ。理由を聞くと、奥さんに我慢の限界だって言われた

んだって。それも院長大先生からの命令らしいの。だって奥さん、私とのこと前からご存知だったみたいだし、健一さん看護婦さんともいろいろあったみたいだし。健一さんの女性関係は諦めてたのかもしれないわね」

真澄は信じられないような夫婦だと思った。それだけでなく、よくそれで高倉と村主は二人揃って長年カルテットを続けていたものだと感心した。しか

もときには練習を、広い練習室のある高倉の家でもしていたのだ。ただ、休憩で茶を出すのは高倉自身がやっていて、奥さんが顔を見せることは一度も無かった。また、公民館などを借りて練習することが殆どで、そのようなときに終わってからみんなでファミレスで話し込んだりしていたのだ。それが、二人だけのこともあったのだろう。今考えると、それらのことがすべて納得できる。

「高倉さんとは長いの」

「三年以上。だってはじめ熱くなっちゃって、彼が妻と別れて結婚したいって言うから。私、夫に浮気がばれちゃったから、すみませんでしたって離婚したのよ。彼も別れるって言ったのに、三年たっても変化なし。私、甘かったわ。いずれあの病院が自分のものになるっていうのに、そんなチャンスを捨てて私なんかと、手に手を取って、北の果てまで逃げ

ましょうなんてあるはずないわよね。それに気が付いてから、私だんだん彼のことが嫌になり始めたの。そこに別れ話でしょ。むしろ嬉しかったくらいよ。だけど月に一回は会いたいだって。あきれるわ。私を単なるセックスのはけ口にしか考えてないのね。私この際完全に別れましょうって言ってやったわ」

美恵子は、カルテットの場では想像もつかないような言葉を、腹の底から吐き出すように喋り続けた。

「初めは彼の言葉を信じていたし、仕事以外何にもない主人よりも優しいし・・・」

そういえば、村主の夫はコンサートの本番があっても一度も顔を見せたことがない。そのうち離婚してしまったので、カルテットのメンバーは彼女の夫の顔を知らない。美恵子は続けた。

「贅沢なレストランやホテル、それにプレゼント、主人には内緒で私密かに舞い上がっていたわ」

「それって離婚のちょっと前のことじゃない？カルテットのバイオリン族絶好調だったよね」
栗林が口を挟んだ。
「ま、そのプレゼントが元でバレたんですけどね。私がどんなネックレス持ってるかなんてまったく関心がないと思っていた主人が、私が彼のプレゼントのをかけてたら、『それどうしたんだ』って言うの。もしかしたら主人にも女がいて、ネックレスに興味

があったのかもしれないわね。私、ドキッとしたけど自分で買ったって言ったの。そうしたら、幾らだったかとか、そんな金何処から出したのかとか、挙句の果てに通帳やクレジットの出金の証拠を見せろって言うのよ。何もかも白状してしまったわ。それで主人とはお別れ。ああいう時子供がいないと早いわね。私は健一さんがいるから平気と思っていたけど、さっき言ったとおりでとんだ見当違いだったわ

け」

村主美恵子は言いたいことを言い終ると大きく息を吐いて背もたれに身体を預けた。

「実は、桂山さんと話したんだけど、お二人はカルテットを続ける気はないかね？」

と栗林が言ったが、美恵子はすぐには返事をしなかった。そして真澄の顔を見たりしながら考えている風だったが、

「皆さんがいいって言ってくれるのだったら、私はいいけど」
と、ポツリと言った。そして、
「高倉さんはどうか、私にはわかりませんけど」
と付け加えた。
栗林が桂山と相談したときには、村主と高倉は一緒になると思い込んでいたので、二人一緒に復帰もありえると考えたが、思惑外れであった。

「そういうことなら、村主さんから高倉さんにどうするかなんて聞けそうもないね」
「聞けないですよ」
「直接聞くしかないか・・・」
「いまごろ、何食わぬ顔して奥さんの前にかしこまっていると思うから、直接電話してみたら？」
「わかった。そうするしかないね。それでもし彼も復帰するって言ったら、村主さんそれでも続けられ

る？」

「あの人がいいって言うんだったら、私は音楽に集中してするからいいわよ」

翌日の夜、栗林は高倉のところに電話した。電話には奥さんが出た。夜中にかかってきたときの冷たい感じの声が聞こえてくる。

「カルテットでお世話になっている栗林といいます

が、健一さんはご在宅でしょうか？」
「どういうご用件でしょうか？」
「カルテットのことでちょっとお話したいことがあるので」
「そのことでしたら、高倉の方は辞めると言っているので、何も言うことはないと思いますが」
「いらっしゃったら、少しだけお話したいのですが」
「話はないと申し上げたはずですが。ご用件はそれ

だけですか？」
「ご本人は、本当にそれでよろしいのでしょうか？」
「しつこい方ですね。切りますよ」
「待ってください。だったら二ヵ月後には演奏会もあるので、代わりの人を頼んでもいいかどうか、確認していただけますか？」
「どうぞそうしてください」
「でも、ご本人が・・・」

ここで電話は一方的に切れた。栗林は腹が立ったが、それは高倉本人にではなく、その奥さんに対してで、高倉にはかえって同情の念が湧いた。あすこまで言われたら

「もうほっとけ」

とも思ったが、本人の気持を聞きたいとも思った。翌日の昼間に、会社から二時間ほど外出の了解を得て、高倉の勤務する病院に行った。この病院には診

察に訪れたこともあり、よく知っているのだが、改めて見ると大きくて立派な病院だ。ちょうど昼休みだったので、

「副院長は職員食堂です」

と言って案内された。白衣を着た高倉が一人でカレーを食べていた。栗林を見ると立ち上がって挨拶した。

「やー、恥ずかしい。家内がポンポン言ってすみま

せん。僕もその場にいたのに替わろうとしないのですよ。情けないやら恥ずかしいやらで。本当に申し訳ない」

「いやいや、お会い出来てよかった」

と言ってから、栗林は直ぐ本題に入った。

「あっ、どうぞ食べながら聞いてください。奥様からそのときの私の電話の内容は、お聞きになりましたか？」

「いや、カルテットのことらしいから断わったとだけ」

「そうでしたか。実はカルテットに復帰しないかお誘いしようと思って電話したのですよ。いずれにしてもご本人の口から返事が欲しかったので」

「いや、本当にすみません。あんな女房なものですから」

栗林は、女房も女房なら、旦那も旦那じゃないか

と思ったが、それは顔に出さずに、あくまでも音楽で繋がっている仲間として、

「それで・・・、いかがですか。実は村主さんは復帰するとおっしゃいましてね、高倉さんが復帰されたとしても、音楽に集中するから構わないっておっしゃっているのですが。我々にとっては得がたい第一バイオリンですし」

「そうですか。彼女は復帰するんですか・・・だけ

ど、申し訳ないけど私のことは忘れてください。代わりの第一バイオリンだったら、紹介できる人もいますし」

「そうですか？サバサバと割り切ってやりましょうよ」

「僕はそうしたくても、家内が気持よく出してくれませんよ。村主さんがいなければ別ですけど」

「・・・しかたないか・・・じゃ、代わりのバイオ

リンを探しても構いませんか？」
「ええ。勝手言ってすみません。バイオリンの心当たりは大丈夫ですか？もしお困りだったらここに電話してください」
そう言って、高倉は栗林に名刺を渡した。≪高倉病院副院長　循環器科主任　高倉健一≫。
病院の副院長であることは知っていたが、こうして改めて見ると立派な肩書きだ。やっぱり金と地位

があるとああいうことになるのかと栗林は思った。しかし高倉は、あれだけ音楽を情熱的に弾く男だから、情熱家なのだろうと思いなおした。本当に情熱にほだされて村主のことを愛したのだったら、地位も金も捨てればいいのに。それなら見直してもいいのだが。これでは村主がかわいそうだ。

「じゃ、お元気で。将来カルテットが続いていたら、また一緒に出来るときがくるかもしれないですね」

栗林が丁寧に一礼すると、高倉も立ち上がって礼を返した。顔を上げたときの高倉の表情は寂しそうだと、栗林は思った。

栗林は第一バイオリンをしてくれそうな人を探し始めた。アマチュアのバイオリン弾きは幾らでもいるし、知っている者もたくさんいる。しかし、技術も音楽性も高倉に匹敵する者となるとめったにいな

い。それでも栗林は思い当たる二人に連絡を取ってみた。しかし一人は朱鷺カルテットの本番の日に都合が悪くて駄目、もう一人はこのところ仕事に追いまくられているので勘弁してくれと断わられてしまった。あまりゆっくり探している暇も無い。栗林は高倉病院の副院長の名刺を見てダイヤルをした。高倉はちょうど自室にいた。

「この前はすまなかった。で、何か」

「他でもないんだが、やっぱりいいバイオリンがいないんだ。この前心当たりがあるって言ってたから電話したんだけど」
「うん、僕なんかよりよっぽど腕が立って、センスもいい人だよ」
「女の人」
「ああ、飛び切りの美人だ」
「まさか高倉さんの別の彼女じゃないだろうね」

思わず本音が出てしまった。
「残念ながら違うけど、聞いてみるよ。本番十一月十二日だったよね。じゃ、連絡ついたらこっちから連絡する」
高倉から返事があったのはその夜だった。
「駄目だった。本番が重なっているらしい。それで今回に限りということで、もし僕でよかったら弾かせてもらうよ。だめかな」

「駄目なはずないだろ。でも奥方は大丈夫なの」
「いまここにいるけど、今回限定で許可が出たんだ。よろしくお願いします」
高倉は、「今回限定」を強調していたが何だか嬉しそうだった。高倉と村主が揃って退団すると言い出した問題は、大波を潜り抜けてあっさりと、ひとまず元の鞘に収まった。
いよいよ練習だ。ベートーヴェンの一回目の練習

だけで、ストップしていた。だいぶ時間のロスをしたが、同じメンバーだから何とかなるだろう。栗林は安堵の胸をなでおろした。そしてこの決着を直ぐに桂山と村主に報告した。二人とも喜んだが、村主はやや複雑な表情を含んだ声を出していた。

復活した朱鷺カルテットの練習は次の土曜日の夜、公民館で行なわれた。

問題発生のときの練習よりも、明らかにみんな明るい表情である。問題の二人も意識して普通に振舞っている。

今回限りと言う高倉の合図で力強い二つの和音が鳴り響いた。それは栗林の胸の奥に響き渡った。おそらく他の三人にとっても同じだっただろう。表情を見ればわかる。曲はその和音のあと、まるまる一小節沈黙してから、第二バイオリンから滑らかなメ

ロディが始まり他のパートが加わる。しかし二小節だけでまたプツンと止り、またまる一小節の休止が来る。そして滑らかなメロディが再開する。曲は徐々に動きが連続するようになり、四つのパートが高揚したところで冒頭と同じように、二つの決然とした和音が鳴らされ、ここでも一小節沈黙してから音楽は動き出す。その後は徐々に興奮の度合いを高めて激しい音楽になだれ込んでいく。弾いている四人の

心もその音楽と同調して高まっていく。やはりこのメンバーでないとこうはいかない。栗林はこのような名曲を弾ける喜びを感じていた。みんなの表情を窺うと、真剣そのものである。真剣な中に満足感も感じられる。もちろんこの日の練習はまだ仕上げとは程遠い問題の多いものだったが、そのミスを踏み越えながら力強く楽章の最後まで止らずにいってしまった。

「とりあえず、第二楽章もやってみよう」
高倉の合図でゆっくりとした第二楽章が始まった。チェロが、付点のリズムを持ったベートーヴェンならではの崇高なメロディを弾き始めたとき、村主が弾くのを止めてしまった。見るとうつむいた頬に涙が流れている。村主ならずとも、音楽は胸がいっぱいになるようなところだ。
「ごめんなさい。こんな喜びが得られるのに投げ出

そうとしたりして、本当にごめんなさい」
「本当だね。この四重奏団はすごい楽団なんだよ」
と高倉が感慨深げに言った。

（了）

＊この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものです。

編者あとがき

著しくＩＴ技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末の Amazon のペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみながら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。それは近年まで続けられていたことがパソコンの中身から分かりました。傍におります妻の私は、とうに文筆を止めてしまっていると思っておりましたので、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ（URL:https://www.duoyamanka.com）への投稿の形でも発表していきたいと考えておりま

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1　山中與隆（やまなかともたか）の名前について

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありますが、表示されます。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生れ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れたいと思っています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なものなどジャンルを選びませんが、常にベースには何らかの形で音楽が絡んだものにしたいと考えています。

ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によってその物語にも音楽にも感動してもらえるような作品を完成させたいと思っています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

＝電子書籍＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた
さまよえる視察団
蒸発の衝動
インテルメッツォ
爆発
妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男
オセロー
テンペスト
定年の晩
魂の三重奏
ロシアンルーレット
ささゆり

才能移転
ある三文作家が見たもの
けんか
袖ふれあうも
ミスターフェイト
峠を越えて嫁入りした女
花火見物
ある小学校教師の敗北

三坂峠　二話
第一話《お蓮・勘兵衛　悲恋の墓》
第二話《緑のトンネルで》
阿弥陀山
ゴーシュの華麗なる転身
ある男の臨終
野の寂しさ
四重奏

親も子も老いて
わしゃ、ただの山ザルじゃ
リョウコからの電話
カルテットのある風景
「オセロ」～手紙版
出来る間に、出来るだけ
なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

4 トリオ・ソナタ
5 不協和音
6 解散
7 音楽のある生活
8 ビオラを弾く生活
9 疑問
10 生きがい
11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

＝既刊のペーパーバック＝

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集２―ある三文作家がみたもの他

短篇集３―ミスターフェイトほか

String Fiction Series 01
弦楽四重奏団 a

2022年10月30日初版発行
著者:山中與隆
編集:山中伶子
https://www.ac-illust.com/
・タイトル: 弦楽器グラデーション
作者: t-dunさん
イラストのID: 2610321
・タイトル: 花のフレーム2(黒)
作者: 猫エンジンさん
イラストのID: 1587380
https://www.silhouette-ac.com
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105365
・タイトル: 譜面台
素材のID: 105366
https://www.photo-ac.com
・タイトル:チェロ
作者:r**********mさん
写真のID:3669919
©Tomotaka Yamanaka 2022
https://www.duoyamanka.com